

## 好きな画家

### ジョルジュ・ルオー

私のお気に入りの画家No.1は「ルオー」です。ルオーの絵を初めてみたのは、八ヶ岳の近くの「清春白樺美術館」でした。絵を見たときに、ドカンという衝撃を受けました。何かを感じました。以来、この美術館へ通いつめて、15年になります。

晩年のルオーの絵は、鮮烈で、精神性も感じられ、しかも暖かく訴えてきます。絵と言うより、体から光を放つ彫刻のように、何かを訴えてきます。そんな迫力が好きでたまらない！

ルオーの展示があると聞けば、どこへでも出かけて行くことにしています。

「彫刻のよう」と表現しましたが、実際に、繰り返し、繰り返し、色を重ねていって、分厚い油絵になっています。それと、最後の仕上げの確実な線(あるいは面)のタッチがすばらしい。太くて、重厚であったり、軽妙であったりする。まったく「参りました」という感じです。ルオーが描いている写真の姿を見ると、キャンバスを額縁にはめて描いていたりする。真似をしてみたところ、「なるほど」という感じが得られました。その後は、ときどき額縁に色を付け、作品との調和を整えたりします。

### 川合玉堂

玉堂の絵は日本画に属しますが、晩年の作品には、紛れもなく墨絵をベースに淡彩を付し、多くの名作を残しました。「月天心」「彩雨」がそれです。しかも、日本独特の筆の腹を使って描くいわゆる「面描きの水墨画」です。

玉堂自身、写生をよくし、伝統的な画風にとらわれず、独自の自然を描いたところに大きな魅力を感じます。水墨を志す者にとって、玉堂の絵は「芥子園画伝に勝るお手本」と思います。

玉堂は、晩年に奥多摩に住み、春は梅、夏は清流、秋は紅葉、冬は雪と、四季を描き続けました。

昨春、御岳にある玉堂美術館を訪れ、大きな発見がありました。美術館の周辺には、玉堂の絵にある樹木と枝振りがそっくりそのままの景色がありました。発見とは、美術館のビデオで見た「木々を描く玉堂の描き振り」です。その描く速さは相当なもので、脳裏に描かれた象を一心不乱に描きつけているという姿でした。「あれくらい速筆だから、素晴らしい墨色が出て、賦彩も美しいのだ」と納得させられました。ご存じのように「墨は書く速さで墨色が変わります」。

模写をしているときに、「とてつもなく速い運筆で描いているのではないか」という予感がありましたから、なるほどという感想になった訳です。

画家が描いているときの姿を見ることは、絵を学ぶ者には、大いに参考になりますね。

### 安井曾太郎

この作家は、最近好きになりました。京都国立近代美術館で見えたら、突然ドンときた絵があった。作品名を見ると安井曾太郎の代表作「婦人像」であった。10数年前に、ルオーを初めて見たときと同じ衝撃だった。しばらくして、「生誕110年記念安井曾太郎展」が京都へ巡ってきたので、

見に行きました。見ているうちに、何作かから「ドンドンと衝撃」が伝わってきました。巨匠を評することはやめておくとして、ルオーの時と同じく「最後に重ねたであろう仕上げの線のタッチ」が実に効いていた。ドンドンとくる衝撃と関わりがあるはずだ。

その後に東京で見た「奥入瀬の溪流」にも、同じタッチがあった。溪流の暗がりの中に、樹が2本によきによきと立ち、光を受けて力強く立っていた。その光を描いたグニュグニュとした線がなぜか絵を目立たせていた。

安井曾太郎を書いた本を読む機会がありました。曾太郎は「際限なく絵に筆を入れた」そうである。奥さんが見て「絵が仕上がった」と思い、「そろそろおやめになったら！」と言って初めて、筆を置かれたという。これを読んで、ルオーの執拗な描き込みとどこか似ていると思えました。繰り返し筆を入れる中で、「作品の中に光(たぶん、こころ)が描き込められる」のであろう。

水墨画をこのような油絵と対比すると、水墨は「一発勝負の表象性」があり、「油絵の描き込み」とは、相互に対極にあると思う。いずれの絵の描き方も、気が基本にあるのであろう。